
放課後

みゆこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後

【Nコード】

N9033C

【作者名】

みゆこと

【あらすじ】

私、相川桃子は夕暮れの差し込む教室で一人机に向かっていた。誰もいない教室は異空間のようだ。

プロローグ

元来自分は脇役タイプなのだ。

周りでおこっているドラマをいつもぼんやり見ては、（大変だなあ。熱いなあ）

などと他人事のように（実際他人なのだが）おもっていたものだ。そうなのだ。

それなのに・・・まさかこんなことに巻き込まれるハメになるなんて。

考えてもいなかった。そうあの時までは

教室の窓が橙にそまる。

ゆっくりとペンをはしらせていた彼女は、視線の端に映る朱に思わずドキリとしそちらの方を振り向く。

窓の外では、ちらほらと帰宅する生徒が見える。

空の橙に溶け込まれた景色は、いつも眺めているものとは違い現実のものではないように感じさせる。

ガラッ、

勢いよく開いた教室のドアから、スラリとした長身の男子生徒が入ってきた。

「なんだ、桃子まだやってんの」

「・・・・。」

現実にもどされてしまった。

窓の外を眺めていた彼女は、恨めしそうに男子生徒を見やった。

男子生徒、こと 小沢和樹はサッカーのユニフォームの襟をパタパタと仰いで

「大変だな」

と、その言葉とは反対ににやにやと笑っている。

「ほつといてよ。」

呟き、先ほどと同じように机に向かう。

なんのことはない、遅刻の為の反省文を書いているのだ。

「でも、園田の奴もよく数えてるよな。入学してから10月の半ばまでで50回目の遅刻だなんて。」

「そんなわけないでしょ。」

と言うものの、ありえるかもしれないと思い直す。

園田、というのはこの高校の教師で担任だ。

50代半ばを過ぎているだろうか、と思わせる外見はそれ実35歳。性格もネチネチと神経質で、根に持つタイプだ。

まあ、これは彼女の主観だが。

それというのも入学式の日、園田のことを（用務員のおじさん）と思いきみ「おじさん、トイレの電気が切れそうですよ。」と言った後から何かと彼女に厳しくなった気がする。

まあ、数えきれないくらい遅刻をする桃子も桃子なのだが。

「部活サボり？」

机に向ったまま話題を切り換えるために、彼女 あいかわとうし 相川桃子が口を開く。

「んにや。途中で抜けてきた」

それをサボリというのでは？

ちらりと視線を小沢にむける。

小沢は教室を一瞥して自分の机からノートを取り出す。

「数学の課題。明日提出だろ？途中で思い出してさ」

「真奈まななら今職員室に行ってる。」

彼の頬がやや紅く染まってみえたのは、窓から漏れる橙のせいばかりではないだろう。

「・・・別に」

図星を指されて言葉につまっているのか、あらぬ方向を見ている。

「ま、どうでもいいけど。」

彼女はまた机に向かう。

「・・・ちよつとは協力するとか思わないわけ？ 幼馴染のよしみでさ。」

「思わないわね。」

小沢は均整のとれた顔を歪め口を真一文字に結ぶ。

彼女は一つ溜め息をつきペンを置く。

「幼馴染からの忠告ね、モタモタしているとあつ、という間に他の奴にもってかれるよ。」

そうだ。先週だってバスケット部でなかなかルックスのいい先輩に真奈美は呼び出されていたのだ。

どうやら、親友はお断りしたようだが。

「分かってるよ。だから桃子がさりげなく俺の事をアピールしてくれりゃ」

「なんでワザワザ私がそんな事しなきゃなんないのよ」

「だからそれは幼馴染のよしみで」

言い合いをしていると、

「おまたせ。」

当の松吉真奈美まつよしまなみが教室のドアから姿を現す。

「あれっ？ 小沢くん？」

小首を傾げて、ふわりとした長い髪が揺れる。

長いまつ毛をパチパチと瞬かせる。

「あ、いやその、忘れ物して。」

慌てた様子でノートをひらひらとかざす。

「あ。数学の課題？」

「ああ。」

「結構難しかったよ。」

「そう？」

小沢が前髪をかきあげている。

（なにかっこつけてんだか）

幼馴染の様子を見てもうひとつ溜め息を落とした。

「桃子ちゃん終わった？反省文」

真奈美は桃子の机の前の席につき、椅子を反対に向けゆっくりと腰を下ろす。

「あとちよつと。」

「こんなの待ってたら明日になっちまうよ」

横から小沢が口をはさむ。

「うるさいなあ。あんたもさぼってないでさっさと部活戻れば？それともまだここに居たい訳でもあるのかしらねー？」ちらりと真奈美に視線をやる。

「な、何いってんだよ」

みるみる彼の顔が赤くなる

それを隠すように、くると二人に背をむけると「じゃあな」と逃げるように教室を出て行った。

「仲いいね。ふたりとも」

「まあ、小学校からの腐れ縁ってやつだからね。仲はよくはないけど」

「幼馴染かあー。いいなあ」

真奈美はうっとりとしている。

桃子はペンを動かしながらちらりと親友を見た。

「今までなんとも思ってたのに、ちょっとしたきっかけで意識したのよね。そして、二人ともギクシャクしだして・・・」

真奈美は妄想の世界に突入したようだ。

（ホントに夢見る乙女なんだから。ま、あいつも不便なことね、全くもって意識されてないなんて。とにかく私は現実問題を終わらせないと）

親友に構わずまたペンを走らせるのであった。

プリントを持ち上げ「うーん」と大きく伸びをする。

「やっと終わった。ごめんね、遅くなって。」

「そう思うなら今後遅刻しないように。」

真奈美の指先が軽く桃子のオデコを突く。

「てっ。あ、あいつノート忘れてる。」

「ほんとだ。」

くすくすと笑って、「明日までなのにな。」と真奈美がそのノートを見つめる。

（わざととか？いや、舞い上がって忘れたんだな。）

事実はもちろん後者である。

「私職員室に反省文持つてくから、真奈は和樹にそのノート届けてやれば？」

「え？あ。そうだね。困るもんね。じゃあ、終わったら校門の前で・・・」

「園田の小言長くなると思っから、あんまり遅い時は先帰ってて。今まで待たせたのに悪いけど。」

「いいよ。じゃあその時はメールするね。」

二人は教室を後にした。
窓から差し込む夕焼けは少し薄暗くなってきた。

「しつれいしましたー。」

「明日は遅刻するなよ。」

背後から野太い声が追いかけてくる。

桃子は聞こえない振りをし、ガラガラと職員質のドアを閉め大きなため息をついた。

30分もみっちり担任のお説教をくらったのだ。

「疲れた・・・」

立っただけだが、校庭を何周も走ったような疲労感が残る。

（もう真奈は帰ったよね。本当に園田の小言は長いんだから。携帯携帯・・・）

ぶつぶつと言いながら鞆をこそごそ漁って廊下を歩いていると、
どんっ　不意に何かにぶつかり鞆の中身をぶちまけた。

ガシャン！　　バサバサッ

「いたっ。」

「わっ！？」

軽く尻もちをついて廊下に散らばった鉛筆やノートを眺めて（・・・
今日はなんてついてないの）と自分を呪った。

「大丈夫ですか？どこかぶつけました？」

慌てた様子でひよろりと脊の高い青年が桃子の顔を覗き込む。

「あ、はい」

（誰だっけ？確か生物の先生だったような。）

もう1年の半ばというのに、先生の名前を覚えてないというのもぼんやりしている桃子らしいのだが、実際この先生は若い男の先生という割にはあまり女性徒の話題にものぼってこなかった。

いや、変人という点で話題にでていたか。

「すみません。僕がぼーつとしてたから。」

廊下に散らばった物を拾い上げながら申し訳なさそうに桃子を見る。
「はあ。」

桃子はのろのろと立ち上がりパンパンと制服のスカートをはたく。

（私の方こそぼんやりしたんだけど・・・）

落ちた消しゴムに手を伸ばしていると、ふとその腕に何かが触った。
「つつ・・・」

桃子はその黒いものを確認すると意識を放棄する事になった。

薄れていく意識の中「あ！きごさん」と慌てた声が響いていた。

プロローグ（後書き）

つたない文章ですがすみません。 ゆっくりと進めていきたいと思
います。

きこさん

消毒液の匂いがする。

いや、これはちよつと違う匂いだ。少し鼻を突くような。

桃子は匂いの元を確認する為にゆつくりと瞼をあげた。

視線の先には、なんだか薄気味の悪いカエルやイモリやらのホルマリン漬けがずらりと棚にらんでいる。

「わっ！！」桃子は急に起き上ったものだから、今まで横になっていただろう長椅子から　ドスン　と落ちた。

「アイタタタ」

したたか腰を打ちつけてしまった。

（なにここ。ホラーハウス？ていうか、なんで私こんなところに・・・）

「どうしたんですか？」

隣の部屋、――科学室だろうか――からひよろりとした先ほどの先生が顔を出した。

「あ。大丈夫、です」

腰をさすりながら長椅子に座りなおす。

桃子は周りを見回してその気味悪いホルマリン漬けをちらりと確認した。

（一体どれくらいあるの。このホルマリン漬けは・・・）

桃子の考えてる事を察したのか、その先生は誇らしげに

「すごいでしょ？これ。小さいのも含めてもうすぐ100体になるんですよ」

「確かにすごいですね、それより私なんでここに」

「さっき倒れたんですよ。保健室がもう閉まってたのでここに。大

丈夫ですか？本当に」

「・・・そうだ。気絶したんだった。確か・・・
思い出して桃子は自分の右腕を見て「ぎゃあああああああ」と今更ながらに叫んだ。

もうすでにその生き物は自分の右腕にいなかったのだが。
水道の蛇口を見つけると、目に見えない速さで移動し手を洗った。
ぶるぶると震えがきた。

「せつ先生・・・さつきごき・・・が」

「ああ！きごさんですね」

「え？」

「すみません。きごさんが脱走してあなたの所にいつちゃったんですね」

困ったような笑顔をみせると、彼のズボンのポケットからあの黒い奴がかさかさとでてきた。

「きゃあつ。ちよつとまって」

桃子は10メートルくらい後ろに下がった。（実際は2〜3メートルだが本人はそれくらいの心境なのだ）

「あの・・・先生それは」

「これですか？ごきぶりに似てるでしょう？」

先生は穏やかな笑顔をみせてソレをつまみあげた。

「ちよつと！近づくしないでください」

「・・・すみません。」

しゅんと肩を落としてソレを手のひらに包み込んだ。

（子供みたいな先生だな。ていうか、その手・・・）

桃子はあることに気が付き愕然とした。

「まさか。先生その手で私を運んだんですか？」

「そんな、全然重くなかったですよ。気にしないで下さい」
引きつり慌てた様子で両手を左右に動かす。

「・・・重かったんですね。ってそうじゃなくって。ということは、
」
ぶつぶつと独り言のように呟き、（その変な虫をべたべた触った手で運んだんですね・・・）

桃子は潔癖症という訳ではなかったのだが、極度の虫嫌いなのだ。特に小さくて足がたくさん付いてるのが苦手であった。

（帰ったら速効制服クリーニング出そう）
本当なら今すぐ脱いでしまいたいがそういうわけにもいかない。

なんだか どつ と疲れがでてきた。

「じゃあ、あたしそろそろ帰ります。」

「そうですね。もう暗くなってますし。」

窓の外を見たらずいぶん暗くなっていた。

時計の針は7時を少し過ぎた所だ。

「もうこんな時間たってたんですか！」

学校に残っている生徒は殆どいないであろう。

校舎の中も外も静まり返っている。

いつもとは違う学校の様子に不思議な優越感がわいた。

（夜の学校なんてめったに遭遇できないよね。なんか得した気分）
もつとこの気分を楽しみたいが、そうもいつてられない。

「じゃあ、私そろそろ帰ります。先生ご迷惑をかけました」

「ちょっと待って下さい、送りますよ」

「一人で帰れます」

「だめです。夜道は危ないんですから。」

真剣な顔で言われたものだから 「はい」と思わず返事してしま
った。

（そつえば、この先生なんて名前だったっけ？）
などとぼんやりと考えながら、支度をしているその先生の後ろ姿を

眺めて

「あの、手は洗って下さいね
と声をかけたのであった。」

下校

（送るって、車じゃなかったんだ）

桃子は二人並んで歩きなが落胆を隠さずに先生の方をちらりと見た。
――見る、といっても桃子の目線は先生の胸あたりにあるので
見上げる格好になった。

学校から駅まで1キロ程ある。

電車で2駅乗って駅から近くのマンションが桃子の家だ。

歩きだと1時間はかかるのだ。

そんな桃子に気がついたのか、「すみません。歩くの早いですか？」
勘違いをして見当外れの事をいつている。

「いえ、そんなことないです。ただ」

「ただ？」

「送ってもらつて言いにくいんですけど、てっきり車だと思つ
てたので」

言いにくいといいつつ、ズケズケと言った。

先生の顔が赤くなる。

「そうですね、思いますよね。ちょっと今修理に出していて。す
みません」

（何も謝ることないのに。――）

「修理って、事故ったんですか？」

「いや、当て逃げというやつで」

「警察には？」

「気がついた時には遥か遠くに逃げられてましたから。ナンバーも
わかりません」

情けなさそうに肩を落とす。

「ついてないですね。」

「まあ、いつもの事ですから」

困ったような笑顔をみせ頭をかいた。

(いつもついてないんだ)
妙に納得し気の毒に思う。

「相川さんは、そういえばこんな遅くまで何してたんですか？」
先生が自分の名字を知っていたことに驚いた。

そんなに桃子は目立つほうでもなく、先生の授業でも当てられたこともない。

もしかして、全校生徒の名前を覚えているのか。

「あの、反省文を」

「なんの反省文ですか？あ、遅刻でしょう。」

「なんで知ってるんですか？」

「園田先生がチェックしてるのをみかけて・・・」

言っってから、しまったという風に口に手を当てている。

「・・・ほんとにそんなことやってるなんて」

桃子は呆れてしまった。もっと他にやることはないのだろうか。

ごほん、とひとつ咳払いをし「まあ、遅刻はよろしくくないですね」

「・・・はい。」

「低血圧なんですか？」

「ただの寝坊です。」

「そうですか？でもそれにしても回数が多すぎますし。なんか訳でもあるんじゃないですか？」

今までにそこまで聞かれたことがなかったので、ちよつと驚いた。
いつもなら「寝坊」といえば、誰もが納得していたのだ。

実際、授業中も度々居眠りをして先生達を困らせていたのだから。
桃子は黙り込んで歩いている。

「そういえば、先生。私が休んでる間なにしてたんですか？」
唐突に彼女が話題を変えた。

「え？ああ。ヤモリの生体の観察をしてたんです。最近生物室の窓

にヤモリを見つけたので捕獲しようと画策中なんですが、なかなかすばしっこくて手を焼いているんです。」

大の大人がヤモリを熱心に追いかけてる姿を想像して吹き出してしまった。

「いつ……忙しそうですね。」

当の本人はキョトンとしていた。

いつも間にか駅に着いてしまった。

会社帰りのサラリーマンや、学生、OL風の女の人など大勢の人が行きかっている。

「それじゃあ、先生。私ここで……」

先生の肩越しから、人混みのなか見慣れた人物を見つけ、思わず彼の手を掴んだ。

そのまま、コンクリートの柱の影にひっそり隠れる。

「わわっ。どうし……」

「しっ。」

桃子は視線だけその人物に向け、じつと身を潜めた。

その人物……先生と同じくらいの長身で黒いスーツを着こなし明るい髪色をした。恐らく二枚目といわれる部類の顔立ちだろうホスト風の青年を見ていた。

横には、派手で美人なキャバ嬢らしき女性が怒っているのだろう。

わなわなと肩を震わせていた……かと思うと　　ばしっ！　とその青年の右頬を平手打ちした。

「さいていつ！」

まだ殴り足りなさそうだったが、周りのギャラリーが注目しているのに気が付き　そのまま踵を返して走り去った。

一瞬その場にいた人達が足を止め注目し沈黙がおりたが、またいつものような人の波に戻った。
ちらちら、とそのホスト風の青年を見てはひそひそ話して通り過ぎる者もいる。

彼は別段気にする素振りもみせず、赤くなった頬をさすっている。
そしてそのまま煙草を取り出し、火をつけると雑踏の中に姿を消した。

「…………お父さん」

桃子は無表情で呟いた。

先生の方を振り返ると、目を丸くしている。

驚愕しているといったほうがあてはまるだろう。

「すみません。みつともない所みせて。」

「…………いや、相川さんのお父さん？」

「はい。見てのとうりホストしてます。」

「まさか！」

先生はわずかに動揺したようだ。

「いや、そういう意味じゃなくって」

先生が慌てていると、

「桃子ちゃん？」

背後からかわいらしい声が聞こえた。

振り返ると、真奈と小沢が驚いた顔で立っていた。

「なにやってんの？桃子それに、武田先生も。」

と言った小沢の言葉で（あ、武田先生っていう名前だった）

と今更ながら思い出していた。

「いえ、相川さんがちよつと倒れたので気がつくまで待ってたら暗くなりまして…………」

と、たどたどしく二人に経緯を話し出した。

「もう！携帯メール入れてるのに返事こないし。心配してたんだよ」
真奈が大きな瞳を更に大きくし、口を尖らせている。
（そうだ、私も携帯で連絡しようとしてたんだっけ。）

「心配かけんなよなー」

小沢の方は桃子がいなくて楽しい時間が過ごせたのだろう、ちょっとご機嫌だった。

「ごめんね。」

「じゃあ、僕はここで。」

桃子は少しだけ、まだ一緒にいたいような寂しさを覚えた。が、気を取り直すと

「武田先生送ってくれてありがとうございました。」

彼の方を向きお辞儀をした。

「いえ。明日は遅刻しないように。」

困ったような笑顔をむけ「君たちももう遅いから、気をつけて帰るんですよ。」

「うーす。」「はい。」

武田先生はまた来た道に戻って行った。

桃子はその背中を、雑踏にまぎれ見えなくなるまで見つめていた。

昼休み

「納得いかないなあ」

次の日の昼休み。

屋上のコンクリートに座り、真奈美と桃子はお弁当を広げている。もう10月だというのに、昼間は結構暖かい。

ちらほらと、他でもお喋りをしたりお弁当を食べたりしている。

ぽかぽかと太陽の光を浴びて、お腹がいつぱいになり眠くなるようだ。

うとうと、としかけた所で「聞いている？」と、横から真奈美が覗き込む。

「うん、聞いている。聞いている。」

ふわあ、と大欠伸をしてアルミのシンプルな弁当箱を片づける。

「だって、昨日の桃子ちゃんなんか変だったんだもん。私が何言っても上の空だし。武田先生と何かあったんじゃないかって思って。」

「まあ、ひどい目にはあったね。」

桃子は「きごさん」を思い出してはぶるるつ、と身震いをした。

「それより、真奈はなんで和樹と一緒にいたの？あんな時間まで。」

真奈美はぴたり、と動きが止まり「だって、ノート渡したら小沢君と一緒に帰ろうって。駅で桃子ちゃんを待つてる間もせつかくだからって、あんみつ食べることになって・・・」

と、ももごとく喋る。

桃子が気絶している間に、心配もしていただろうが楽しんでもいたので後ろめたいようだ。

「で？和樹の奴はなんか言ってた？」

「え？別に桃子ちゃんの事なんて聞いてないよ。」

慌てた様子で言い訳する真奈美を見て

(あいつめ・・・今度会ったらとっちめてやるう)
と、心に誓うのであった。

「・・・その頃の小沢といえば、「ハックしょん！」

「和風邪かよ。移すなよ！」

「ばっか！風邪なんてひくかよ。誰かが俺の噂をしてるんじゃない？」

「ああ、お前の幼馴染がお前の悪口でもいってんじゃない？」

言い得ている。

小沢は親しい男友達数人と花壇の横でサッカーボールを転がしていた。

「そういえば、その子の友達の松吉さんってかわいいよな！」

びたり、と小沢の動きが止まる。

「睨むな睨むな。横からちよっかいはださねーよ。」ぽーんとボールが宙に浮かぶ。

「でも、マジでかわいいよ。」他の友人が口を挟む。

「そうだな。1年の中じゃあダントツだよな。」

「そうか？俺的には幼馴染のこもいいと思うね。」

それを聞いて小沢はあからさまに表情を歪める。

「ええっ！あいつが??」

「そうだなー、愛想ないけど。なにげに美人さんだよな。」

「うん。ちよつとあのなんの感情も出さないような目がミステリアスだよな。」

ワイワイと言い合いながら「いいよなー、和は」

と、ボールが小沢の所に飛んでくる。

「はあ？全然よくねーよ。あんな鬼のような女」

そうだ、小学生の頃から小沢は桃子には頭が上がない。

今でこそポンポン言い合えるまでになったのだが。

小学5年生の頃、何となく男女が意識しだして男子グループ、女子グループと別れてしまった。

その時のリーダーとなっていたのが、男子が小沢で女子が桃子であった。

ちよつとしたきっかけで喧嘩が大きくなり、リーダー同士のタイマン勝負となったのだが喧嘩でも、ゲームでも、かけっこでも和樹の惨敗だったのだ。

でも桃子は「自分は女だから負けた」と言い、「男子とか女子とかいって、結局2種類の人種しかないし。喧嘩してるのはばかばかしいもつたいたいと思うよ？なんだかんだ言って、みんな異性が気になるでしょ。」

と、至極まともな事を皆の前で言ったのだ。

まあ、決着が着いたことで女子はいいように男子を使うようになった。――女子は弱いから男子にいつも面倒な事を頼む。男子も女子に頼られて悪い気はしない。

（そして俺は女に負けたっていう屈辱感と、それを桃子だけが知っているという後ろめたさであいつには頭が上がらなかったんだよね。）

本当に恐ろしい奴だ、結局は桃子（女子）のいいようになったのであるから。

「おい、和。何ボケとしてるんだよ。」

「え？」

「え？じゃねーよ。幼馴染紹介しろよっつってんの。」

「ああ？あいつは止めといた方がいいぜ。」

「いいじゃん、別に。俺はああいうタイプがいいんだよ。」

「そうだ、そうだ。松吉さん紹介しろってんじゃないんだし。」

真奈美の名が出て、ぴくんと眉が動く。

「わかった。一応言っとくけど、俺はしらんぞ。」

「おう。頼んだ！」

友人は上機嫌になり、自分の前に来たボールを小沢にパスした。

小沢はそのボールを取り損ね、バランスを崩して尻もちをついたのであった。

ファースト・・・

学校のチャイムが鳴る。

チャイムには2種類あつて、始まりのベルと終わりのベルがある。もちろん自分は終わりのチャイムが好きなのだが、特に1日の終わりを告げるあの音が好きだ。

今の季節は陽が短くなり、恐ろしく紅い夕焼けが校舎を照らす。

「こんなとこに居たんだ。」

セーラー服を着た髪の長い少女が教室のドアに姿を現す。

「また一人でトリップしてる。」

くすくすと笑いながら自分の前にゆっくり近寄つて、机を挟んで正面に立つ。

「そんなんじゃない。」

むっ、とした表情をして言い訳をしようと思ったが図星だったので、そのまま横を向く。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

沈黙が落ちた。

いつもなら少女からいろいろまくしたてるのだが。

不思議に思い、ちらりと少女の方に視線をやる。

少女は窓の外をぼんやりと眺めて、「血の色みたいだね。」と呟く。

その声が妙に大人びていたので、ドキリと心臓になる。

窓の外を眺めていた視線が自分の方を見据える。

ドッ ドッ ドッ ドッ ドッ ドッ

心拍数が上がり、体が熱くなったのを感じる。

夕焼けの朱に映る彼女の顔は恐ろしくきれいだった。

瞳を逸らせずにそのまま硬直していると、「きれいだね。」と少女はとびきりの微笑を浮かべ、ゆっくりと顔を近づけ彼女の唇を自分のそれに重ねた……。

驚いたことに、その瞬間自分の心臓は落ち着きを取り戻したのだった。

「だからさー。」

ホームルームが終わったとはいえ、教室にはまばらに生徒達が談笑している。

小沢は桃子の席の前の机に寄りかかり先ほどの件を話していた。

「余計なお世話。紹介してやるなんて。まるで私が男に飢えてるみたいじゃない。」

桃子は小沢をジロリ、と睨む。

「そういうんじゃないかってさ。おまえも男と付き合ったらちよっとは女らしくなるんじゃないかって。」

「そんなことあんたに心配してもらわなくて結構！それより自分の事をなんとかしたら？」

切り返され、「うつ。」と言葉につまる。

隣には当の真奈美がいるのだ。

頬を赤くして、「だから無理だって言っただよ。」とぶつぶつ
独り言を言いながら教室を出て行った。

「まったく、何考えてんだか。」

「そうだよー、桃子ちゃんにはちゃんとした想い人がいるんだも
んね。」

真奈美が意味深な笑顔を浮かべている。

親友がこんなにもこの手の話題が好きだなんて思わなかった。

今まで恋バナのような類の話は桃子には無縁だったから知る由もな
かったのだが。

「だから、なんで私があ先生の事を好きだなんて思う訳？」

桃子は うんざり といった風に首を廻す。

「だって桃子ちゃん、昨日の帰り際先生の事を切なそうに見つめて
たじゃない。私、桃子ちゃんが男の人あんな瞳でみつめるのなんて
見たことない。」

真奈美は真剣な顔をして熱弁している。

「どんな瞳よそれって。」

桃子は自分が少女漫画のヒロインのような目をしている所を想像し
て背筋が寒くなった。

「あ、タイムリー。武田先生だ。」

「まさか。」

と言いつつ、真奈美が指さした方（窓の外の校庭の花壇）を見た。
そこには、花壇に這いつくばり何かを凝視している風の武田先生が
いる。

（また、何やってんだろ）思わず噴き出してしまふ。

じりじりと花壇の中に入っている所に、桃子の担任の園田が慌てた
様子でやってきた。

少し花壇を踏んでしまったのだろう。ガミガミと何か言われて、武

田先生はしゅん、となっている。

桃子が笑顔でそれを眺めていると、「そんな瞳」と言って、真奈美は桃子を見ている。

友人にひとり笑いを見られて、珍しく頬を赤くする。

「これは別に恋をしてるからじゃなくて、あの先生が面白いから。」
「ふーん。」

真奈美は納得してない様子で横目で桃子を眺めた。

それを気にする風もなく、桃子はまた窓の外に視線を移した。

外では長身の背中を小さくして、まだ園田からのお説教を受けている武田先生がいた。

窓からはもう秋だというのに、まだ温かい風が教室にながれこんできた。

父と電車

「ただいま……。」

声をかけるも、マンションのドアを開けるも返事がない事は分かっている。

桃子は鞆をダイニングの椅子に置き、冷蔵庫からパックのいちご牛乳を取り出すとごくごく、とそのままラッパ飲みした。

行儀が悪いと自分でも思うのだが、別に誰もそれを咎める者もないので（そしていちご牛乳は桃子しか飲まないの）それを止めることはなかった。

「おかえり」

声がして牛乳をこぼしそうになった。

誰も居ないと思っていたのに、振り返るとダイニングの入り口に髪の色 of 明るい上下ジャージの背の高い男が立っていた。

「居たんだ。びっくりした。」

桃子がごほごほとむせていちご牛乳をテーブルに置いた。

「ああ。今日は早いな。」

その男……相川孝平は冷蔵庫を開けミネラルウォーターを取り出す。

「まあね。」

孝平が横切った時に香水の香りがしたが、それには気付かない素振りです。

（いつも私が帰ってくる時はいないくせに）と、桃子は内心悪態をついた。

喋るのが面倒なのでそのまま自分の部屋に向かおうとして、思いなおし足を止める。

「そういえば、昨日駅で見かけた。」

孝平はちよつと驚いた顔をして桃子を見る。

（何日ぶりに目が合ったかな。）

などと思いながら自分の父親を眺めた。

「・・・・・・そうか。」

孝平はそれ以上言い訳するでもなく、慌てる素振りも見せなかった
ので桃子は軽く溜息をついた。

「それだけ。」

と言い、今度は本当に自分の部屋に足を向けた。

――パタン――と部屋のドアを閉めた。

その音は桃子と孝平との間にある心のドアのように思えた。

いつもそうなのだ。

何事が起こっても、父はまるで自分の事ではないように興味を示さない。

それは桃子に対してだけではなく、誰に対してもである。

そしてそれは、桃子が幼少の頃から変わっていない。

それが孝平の性格からくるものなのかどうかは桃子には分らなかった。

というか、自分に興味のない父親に対して桃子も（ただ面倒をみてくれる人）くらいにしか思っていなかったのである。

ベッドの上に制服のまま「ごろん」と横になる。

とたんに睡魔が襲ってくる。

「今日は眠い・・・・。」

ふわあ、と大欠伸をして壁にかけている時計に目をやる。

時計の針は午後5時を指そうとしていた。
ゆっくりと瞼が下がる。

うと、うと。と、意識がぼんやりしてくる。

瞼の裏に浮かんだのは、武田先生が困った顔で「この香水は・・・」
と園田先生に説明している様子だった。

「51回目だぞ。」と言い園田先生が薄くなっている頭をかきながら怒っている。

その光景が霧がかつてきて体が深い底に落ちていく感覚を覚えた。
そして、そのまま桃子は深い眠りに落ちたのであった。

ハクシユン。

派手なくしゃみをして、ハンカチを口に当てる。

もう片方の手は電車の手すりを掴んでいる。

昼間はまだ暖かいが、朝方はさすがにもう肌寒くなってきた。
ぐすぐす、と鼻をならした。

今日はいつもより2本も早い電車に乗ったので比較的乗客が少ない。
それでも座席に座れるという程ではないので、桃子は入口のドア付近の手摺りに立っていた。

昨日あのまま眠ってしまったので、今朝は朝早く目が覚めてしまった。

そのままシャワーを浴びて、する事もないので早めにでたのである。
目覚めた時には父親の姿はなかった。まだ仕事から帰ってきてない

ようだった。

電車が次の駅に停車し、乗客が乗り込んでくる。窓の外をぼんやりと見ていたが、ホームから慌てて走ってくる人影を見つけて「あ。」と思わず声が出る。

入口のドアが閉まろうと音をたてた。

彼が電車に駆け込んだのと閉まるのが一緒だった。ぜいぜいと息をきらしている。

「おはようございます。武田先生。」

桃子から彼に挨拶した。

それで桃子に気付いたようだった。

「あ。相川さん。おはようございます。」

胸に手を当てて呼吸を整える。

右の頭部の髪が　ぴょん　と跳ねている。

桃子はそれを見つけて目を細める。

「一緒に電車だったんですね。」

「そうですね。」

桃子の隣の手摺りに掴まり汗を拭っている。

「いつもこの電車なんですか？」

「はい。もう1本遅いのはものすごく混んでるんですよ。」

汗を拭きながら困ったような笑顔で答えた。

（だからそんなに慌てて乗ったんだ。）

「……そういえば昨日校庭の花壇で何してたんですか？」

問われて武田先生は顔を赤くしている。

「見てたんですか？」

聞いて悪かったかな？と、言っしまつて桃子はちよつと思った。

「きごさんが脱走してしまつて、ちよつと探してたんです。」

「……見分かりました？」

園田先生に絞られていた事にはあえて触れなかった。

「はい。園田先生が見つけてきてくださって。」

「そうなんですか。」

（だからあの時怒っていたのね。）

普段なら花壇を踏んだくらいであんなにしつこく説教するような先生ではないのだ。

おそらく自分の持ち物か何かにきごさんが入り込んでいたのだろう。

「ほら、元気に・・・」

武田先生はポケットから何か取り出そうとしたので、桃子はその手を慌てて掴んだ。

ちょうどタイミングよく電車が大きく揺れたので、桃子はバランスを崩し武田先生の胸に顔を埋めるような格好になってしまった。

――男の人の匂いがする。

満員電車に乗りなれているので、男性に接触することなんて何度もあるのだが。

香水の香りでも男臭い煙草の匂いでもない、先生の匂い。スーツの上からこつこつした先生の胸の感触を確かめて。

桃子は体の奥が熱くなるのを感じた。

「わっ！すみません。」

武田先生が驚いた様子で桃子から飛び退いた。

顔が赤くなったりあおくなったりしている。

「私はバイ菌ですか。」

勢いつけて離れられたので、桃子は傷ついたという風に言っていた。

それを見て、彼は引きつった顔をして否定している。

桃子はふん、と窓の外に視線をやった。

本当は、熱くなった顔や早まる鼓動を悟られないようにそんな態度

をとったのだ。

もちろん先生はそんな彼女の心情など気づく様子もなく、ただ困ったような顔をしていたのであった。

窓の外はいつの間にかどんよりとした曇り空で、今にも雨が降りそうだった。

「降りそうですね。」

桃子は何事もなかったようにぼつりと呟く。

「そうですね。今日は予報でも雨マークついてましたからね。」

ほっとしたように、武田先生が答える。

電車は桃子たちの降りる駅に到着した。

学生や会社員がわらわらと電車を降りる。

「あれ？桃子もこの電車だったんだ。」

背後から声を掛けられ振り返る。

小沢和樹が驚いた表情で歩いてきた。

別の車両に乗り合わせていたのだろう。

「あ。先生もおはようございまーっす。」

隣の武田先生に気が付くと、さらに驚いた表情で挨拶をする。

「おはようございます。」先生が答える。

「珍しく早いな桃子」

「珍しくは余計よ。それより、いつもこんなに早いのか？」

「ああ。サッカー部の朝練だよ。それより、2人こんなに朝早く・・・

・・・まさか。」

小沢が桃子と武田先生を交互に眺める。

桃子はピン、とし小沢の脚を思いつきり踏んだ。

「いてっ。なにすんだよ。」

「なに馬鹿なこと勘ぐってんのよ。」

桃子は氷のような視線を小沢に向けた。

「先生見ました？この暴力」

幸い見られていなかったようで キョトン としている。

駅の外ではもう雨が降り出していた。

3人は足をとめた。

「桃子、傘持つてる？」

「持つてる訳ない。」

武田先生は鞆から折り畳み傘を取り出し小沢に渡した。

「君たちはこれに入って行きなさい。」

「え？でも先生は？」

「僕はそのコンビニで雨宿りしてから出ますので。」

「先生の傘なのに。」

桃子は恨めしそうに小沢を見た。

俺が悪いのかよ、という風に小沢は頬を膨らました。

「気にしないで下さい。ちょっと買いたいものもあったので。」

先生は軽く笑顔をみせてコンビニの方へパシャパシャと走って行った。

「ありがとうございます。」

2人はお礼を言って、「じゃ行こうか。」

と、不本意ながら小沢と相々傘をして学校へ向かったのである。

雨

ぽつ　ぽつ、

窓の外を見ると雨が降り出してきた。

朝からどんよりと曇り空だった。教室の中は少し薄暗いのだろう電気が点いている。

ぼんやりと窓の外の雨音に耳を傾けていると、心の中のもやもやした物が流されるようだ。

「なあ、寝てんの？」

いつの間にか目を閉じていたのだろう、ふっと瞼をあげると切れ長の瞳を人懐っこそうに細めた幼馴染の顔があった。

「いや……。」

思わず目を逸らしてしまう。

「あいつ、知らね？」

「さあ。」

「相変わらずそっけないな。」

彼は目の前の席に腰をかけると長い脚をぶらつかせている。

教室はまだ授業が始まるには間があるからだろうか、ざわざわ、とあちこちで話し声がしていた。

「……なんかあいつ変じゃね？」

突然真剣な表情になり、こちらを見据える。

「そう……かな。」

私は無表情でその視線を受け止める。

「なんか言ってなかった？怒ってるような感じじゃないんだけどさ。……俺なんかしたかなあ。」

ぶつぶつと言いながら悩んでいる様子の幼馴染を見て少々胸が痛んだ。

あの――放課後での一件以来、自分も頭を悩ませていた。彼女がどういふつもりで自分にキスをしたのか、ただの気まぐれだったのか。

あれ以来特に変わった態度も見られず、向こうも何事もなかったように接してくるので、あの時のあれは夢だったんじゃないかと忘れそうになる。

いや、忘れるように努めようとしているのだが、なかなか頭から離れずにもやもやとしていたのだ。

「俺、あいつにはつきり言おうと思う。」

彼は思いつめた表情をして机の一点を見ていた。

「・・・・・・そう。」

呟いて、心臓がぎゅっ、と掴まれたような感覚を覚える。

「泣かしたら殴るぞ。」

自分はうまく笑顔がつくれてるだろうか。

「まだ、付き合うつて決まったわけじゃねーよ。」

言いながら、彼の顔には余裕が見て取れた。

周りの生徒の殆どが彼女とこいつは付き合っていると思っているようだ。

実際彼女は噂された時も否定するでもなく、笑顔で受け流していたものだ。

二人並んだ姿はまさしく美男美女。幼馴染は少々やんちゃだが、人懐っこさと愛嬌のよさで男子生徒にも女生徒にも人気がある。

彼女はしっかり者でクラス委員などにも選ばれる程皆の信頼を得ている。

「じゃあ、今日はそういうことでよろしくな。」
いつも時間が合うときは3人で帰っているのだ。

「分かった。」

答えて、彼が軽い足取りで教室を出ていく後ろ姿をじっと、眺めていた。

雨の音が更に強まったように聞こえてきた。

「雨強くなってきたね。」

朝から降りだした雨は、午後の授業が終わった時には周りの景色が見えなくなるほど強くなっていた。

「うん。」

頷いて桃子はパンをかじった。

いつも自分でお弁当をつめるのだが、昨日は帰ってそのまま眠ってしまったので購買でメロンパンとクリームパンを買ってきたのだ。

真奈美は机に小ぶりのお弁当を広げて卵焼きを口に運んでいる。

「災難だったね。」

ちらり、と桃子の様子を窺うように言う。

「まあ、私もうかつだった。」

桃子は口をもぐもぐと動かし眉間に皺を寄せた。

あの後、――――小沢と相々傘で登校した桃子は、その

場に居合わせた生徒の注目を浴びてしまったのだ。

小沢は結構モデル男子であったのだ。

学校に着いた後、さっそく3年の女子の先輩に呼び出しをくらった。

――こんな少女マンガみたいなのが桃子の身に起こった事に驚き、少しだけ興味が湧いて足を運んだのだが。

和くんとはどういう関係か、とか 抜けがけするなだとか。

くだらない事を言われた気がする。（それよりも、濃い化粧と改造制服に気を取られていたので上の空だったのだ。）

桃子はめんどくさくなって「あなたたちには関係ない。」的な事を言って早々と退散した。

もしこれが真奈美だったら、と思うとぞっとした。

あんなコギャル風女子が周りを固めてわいわい言おうものなら、真奈美は小さくなって大層怖い思いをするだろう。

（やっぱり和樹には真奈美はもったいない。）

桃子はいちご牛乳をごくごく飲みながら真奈美を見た。

「でも、無茶しないでね。」

と心配そうに桃子を見つめている。

「うん。気をつける。」

桃子がクリームパンの袋に手を伸ばした時、「今朝はどうも。」

と、当の小沢がひよっこりとやってきた。

今日は、その能天気そうな顔を見ると無償に腹立たしくなる。

同じクラスなので、桃子が呼び出されたという事は本人の耳にも入ってるはずだ。

- - - - -
まあ、その時には彼は丁度いなかったのだが。 - -

「何？」

思わず剣のある声になってしまった。

「あの、いやあ。大丈夫かなと思って。」

小沢はちよつとたじろいだ。

桃子はじとつと小沢を眺めていたが、一つ大きなため息をついた。

「・・・。まあ、あんたも大変ね。」

（あんなお姉さま方から動物園のパンダみたいに扱われて。）

「ああ……。まさかそんな事になるなんて。」

小沢は多少罪悪感を感じてるようだった。

少し考えている様子だったが、ちらりと真奈美の方を見る。

「何見てんのよ。」

桃子はすかさず指摘する。

「あ？いや別に。」

小沢はあらぬ方向を見ながら額をかいている。

恐らく、真奈美に告白などしたらどうなるのだろうと心配したのであろう。

彼は私の机の横にぶら下がっている折りたたみ傘に気がつく、「まだ返してなかったんだ。」と、話題を変えた。

「うん。忙しかったからね。」

桃子は横目でちらりと彼を見て、最後の一切れを口に放り込んだ。

「じゃ、私は先生にこれ返してくるね。」と立ち上がる。

真奈美はあの意味深な笑顔を浮かべて「いつてらっしゃい。」と言
い。

小沢は邪魔者がいなくなるので、あからさまにぱつと顔を輝か
せて「気をつけてな。」等とよく分らないエールを送られた。

窓の外の雨は先程より柔らかくなったようだった……………。

雨（後書き）

スローペースで、文章もつたないですがよろしくどうぞ。

カエルのウタ

生物室のドアを恐る恐る開ける。

中は薄暗く、人体模型が真横にあったので「ひっ。」と叫び声を出し、思わず後ずさりしてしまう。

電気が点いていないのでここには居ないのだろうか。

桃子がまわれ右しようとしたその時「なんですか？」と奥から声が聞こえてきて、もう1度声を上げるはめになった。

「電気もつけないで何してるんですか？」

桃子はスタスタと声のする方に近づく。

- - - 周りの棚に並ぶホルマリン漬けには目を向けないように - - -

「はあ、まあ生体の観察というか。」

武田先生が準備室から顔を出して「ああ、相川さんでしたか。」と、ちよつと驚いた顔をした。

(誰と思って返事したんだろ・・・。)

なんとなく、胃の方がもやもやした感じがする。

桃子が怒ったような戸惑ったような顔をして立っていると、足元に何かが通り過ぎた - - -。

いや・・・通り過ぎたというより何かが跳ねている。

「あっ！」

先生が慌ててそれを捕まえようとしたが無駄だった。

1匹2匹ではない。準備室の方から数十匹もいるだろう。 - - -

- カエルが飛び出して来たのだ。

桃子はそのまま固まってしまった。

別に怖くて動けないのではなく、へたに動くと踏みつけてしまいそ

うで動けないのだ。

（お願いだからこつち来ないで。）

自分は透明人間だ、といわんばかりに息も殺している。

その願いも虚しく数匹が彼女の足に貼りついた。

冷たくヌルッ、とした感触を脚に感じて全身に鳥肌がたつた。

失神しそうになるのを（こんな力エルまみれの中に倒れたらえらい事になる！）と、かろうじてこらえ、右手に持っていた傘で力エルを追い払う。――というか振り回していた。

「うぐっ！」

運よく振り回した傘が、這いつくばって力エル奪取中の先生の股間に直撃した。

先生が後ろを向いて悶絶している。

桃子は力エルを追い払いながら「ごめんなさいっ。」と一言。

こちらはそれどころではないのだ。

傍から見たら、傘を振り回している女生徒。股間を押さえて蹲っている先生。数十匹の跳ねる力エルと、かなり滑稽な姿に映ったにちがいない。

（私に生物室は鬼門だわ。）

先生も落ち着き？をとりもどし、ようやく力エルを集めて一息ついたところで桃子は確信したのだった。

右手に握っている折りたたみの傘は、いろんな所にぶつけたのだから無残な姿になっていた。

「あの・・・これ返しにきたんですけど。」

さすがに渡しづらく、おずおずとそれを差し出す。

思い返してみれば、それで先生の急所をヒットさせてしまったのだ。

「あ、ああ。わざわざありがとうございます。」

武田先生はそんな事気にする風でも、気を悪くするでもなくその傘

を受け取った。

「すみません。ぼろぼろにしちゃって。」

「気にしないで下さい。この傘もこんなになるまで使ってもらって本望でしょう。」

「使い道は雨傘としてじゃなかったんですけどね。」

桃子に突っ込まれて先生は困ったように笑った。

と、ちょうどその時「武田先生。」と、若い女性の声がした。

生物室のドアの前で呼んでいる。

桃子は開いたドアからきれいに化粧した女性が顔を出すのを見た。

「あら、相川さん。こんな所で何してるの？」

その女性が先に桃子に気が付き声をかける。

なんとなくその声が厳しく聞こえたのは桃子の気のせいだろうか。

「吉塚先生。」

桃子は、男子生徒に人気のその女教師の名前を確かめるように呟いた。

「武田先生に傘を借りてたので返しにきたんです。」

「そうなの。」

その理由に納得したようで、声色が柔らかいものになった。

「もうすぐ5限目が始まるわよ。そろそろ教室に戻りなさい。」

「5限目は吉塚先生の授業です。」

「あ、あら。そうだったわね。先生は武田先生に用事があるから。」

用事があるわりには、一向に生物室の中に入る様子はみられない。

きっとこの薄気味の悪い部屋に入る勇気がないのだろう。

武田先生がドアまで歩み寄ると「どうしたんですか？」と訪ねた。

「いえ、その。」

ちら、と桃子の方に視線をやり、あからさまに言いづらそうな顔をする。

それに気づいたのは桃子の方であった。

（私が邪魔な訳ね・・・。）

なんとなく腹だたしくも思ったが、気づかない振りをしてそのままそこに突っ立っているのも嫌だった。

桃子は無表情で「じゃあ、傘すみませんでした。」と武田先生に言う、何事もないように生物室を後にした。

廊下を歩いていた桃子は窓の外の雨音に気付き、足を止めてそちらに視線をやった。

窓には怒ったような顔をしている少女が映っている。

（何の用だったんだろ、吉塚先生。）

吉塚先生が来たとき、武田先生は驚いた表情をしていなかった。時々生物室に来るのだろうか。

仕事の話だろうか。

二人はつきあっているのだろうか、そんな噂など聞いたこともないが。

桃子は窓の外に視線をやりながら、二人の事ばかり考えていた。

そして、自分がなぜこんなにも二人の事が気になるのかと不思議に思った。

本来桃子は他人に左程興味が湧かない。

誰と誰が付き合っているだのという噂話も右から左へ抜けて殆ど覚えてもないのだ。

そんな彼女が今はその他人の事で頭がいっぱいなのである。

「変なの。」

呟き、もうその事は考えないというように頭を軽く振った。

.....窓の外の雨がアンバランスな音色を奏でていた。

ともだち

- - - - - 自分はいつもここにいるようでここに居ないような、そんな不安定な感覚を時々感じていた。かといって、別に複雑な家庭に育ったわけでもなく、

生まれて16年間何の不満もなく育ってきた。

そんな普通の生活をしているのに、時々すごく自分が不確かなものに思えたのだ。

でも、あの恐ろしいほど紅い夕焼けの中でおこったことだけは、とても鮮明に。

自分という生き物を、自分の中で強烈に意識できた瞬間だった。 -

- - - - -

「どうしたの？」

ぼんやりと窓の外を眺めていた私に少女が問いかける。

窓の外はあの時のような朱ではなく、透明な蒼にうつすらと雲がかかっている。

周り人は人がちらほらと数人しかおらず、眠ったり本を読んだりしている。

そして大きな書棚が整列しており、古い本がたくさん陳列していた。

- - - 図書室である。

「・・・いい天気だなと思って。」

あれ以来何事もなかったように彼女が振る舞うので、自分も気にする様子を見せないよう注意していた。

それよりも、今は彼の宣言していた事が気にかかっていた。

それは目の前のこの少女に関係することなのだが。

少女はじつ、と私の目を覗き込んでいたのだけど。

私の口が開かない事を悟って、彼女からきり出した。

「涼……私告られたよ。」

「……そう。」

「どう思う？」

聞かれて、思わず私は視線を逸らした。

「いいんじゃない。あいつはいい奴だよ。」

ありきたりな返答をする。

短い沈黙が落ちた。

沈黙に耐えかねて、彼女の方に目をむける。

少女は寂しいような悲しいような。困った笑顔を浮かべていた。

「うん、いい人だね。かつこいいし。人気者だし……。」

言いながら両手の細い指をもてあそぶように動かしている。

自分はその白い指の様子を眺めながら、「うん。」と無意識に返答していた。

「でも、断っちゃった。」

上目使いで私を見る。

「……そうなんだ。」

「うん。」

「どうして？」

「私、他に好きな人がいるから。」

彼女は自分の指に視線を落とした。

その表情がわずかに陰る。

それは誰？と聞いたかったが、そこまで聞き出す度胸はなかった。

そのかわりに、心臓がまた早く動きだすのがわかった。

なんだか少し息苦しい。

「誰だと思う？」

私の心を読んだのか、彼女の方から口を開いた。
真っ直ぐと私を見据える。

私はその視線を逸らす事もできず受け止めるので精一杯だった。
ますます呼吸が苦しくなる。

どれくらいの沈黙が流れただろうか、それはほんの2、3秒だった
のだが、自分にはとても長く感じられた。

「……………ごめんね。」

少女はまた困ったようなあの笑顔を浮かべて、消え入りそうな声で
呟いた。

それは……………なんのごめん？

ちょうどその時、少女の声をかき消すように授業開始のベルが鳴っ
た。

いつの間にか、先ほどまでいた生徒達の姿はなくなっている。

私はこの前の放課後を思いだしていた。

向かい合った彼女から目を離せずに固まる。

少女はじつと私を見つめている。

「ほら、あなたたち。授業始まるわよ。」

はっ、とし その声に体の自由をとりもどした。

カウンターの奥から司書の先生が顔を出している。

「はい。」

「行こう。」

言って、私達は慌てて図書室を後にした。

鼓動がやけにはやるのは授業に遅れるせいでも、走っているせいでも
ない事は既に気が付いていた。……………

まだ日も暮れていないというのに、頬にあたる風は少し肌寒くなってきた。

といってももう、空は蒼と朱のコントラストを鮮やかに描いていた。私はいつも帰る道を選ばず、細い裏通りをぼんやりと歩いていた。

彼女は委員会の仕事で遅くなるので先に帰る事にし、幼馴染は今日は欠席だった。

（もしかして、顔合わせづらくて休んだ・・・とか？）

自分の知っている彼はそんなにやわ、ではないように思っていたので、その考えはすぐに打ち消す。

あの自身たつぷりの顔を思い出して、結構へこんでるんだろうな。と、思うと複雑な気分だ。

通りを歩いていると、その幼馴染が現れたので一瞬幻かと疑ってしまった。

あどけない顔をした少年の肩を、がっしと掴んで何やら話し込んでいる。

その少年は困ったような顔をして首を振っている。

向こうがこっちに気がついたようだ。

ばつの悪い表情をして、頭をかいている。

「何恐喝してんの。」

私はつかつか、と二人の前に歩み寄り腕組をした。

「涼さん。」

少年はあからさまにほっ、とした表情をして困ったような笑顔をむけた。

その笑顔は「彼女」のそれと、よく似ている。

私は「久し振り。」とその少年に軽く笑顔をむける。

そして、傍らにいる幼馴染に顔をむけると

「ずる休みして、何いじめてんの。」

じろり、と睨む。

「いやあ、たまには想と二人で遊ぼうかと思って。」

「ふうん。」

じつ、と問い詰めるように彼を見た。

彼は視線を逸らして、一つ溜息をついた。

「・・・・・・こいつに聞きたいことがあってさ。」

と言うと、表情を曇らせる。

何も言わずにじつと見ていると、観念した様に重い口を開いた。

「俺、あいつに振られたんだ。あいつ好きな奴がいるって。」

予想以上にこたえているようだ。

「・・・・・・そう。」

「それで、好きな奴って誰って聞いても教えてくれないし。弟のこいつなら何か知ってるかと思って。」

彼は自嘲気味に笑った。

「知ってどうすんの？」

「どうもしないけど。ただ、どんな奴が好きなのかって思ってさ。」

どうやらかなり落ち込んでいる様子だ。

自分が知っている彼は、あまり物事に執着せず彼女の事も（落ち込みはするが）あっさりと引き下がらな思っていたのだが。

「僕は何も知りませんよ。」

少年は困ったようにおずおずと彼と私と見合わせている。

その手にはビニール袋を抱えていたのだが、それが一瞬動いた気がしたので私はそちらの方に目を向けた。その時――

「わっ！」

ビニールから青虫が出てきたので思わず後ずさった。

「あ、すみません。」

少年は慌てて虫を袋の中に入れた。

よく見ると軽く下の方が膨らんでもぞもぞ、と動いている。

「何・・・？その袋。」

「はい。僕蝶の幼虫を集めてて、こうさんが持って来てくれたんです。」

少年は満面の笑みをみせて答えた。

よほど嬉しかったのだろう、大切そうにその袋を抱えている。

かわいい顔をして、彼女の弟は変わった趣味を持っていたのだ。

私はその袋の中で、沢山の虫がうじゃうじゃ動いているのを想像してゾッ、とした。

「賄賂？」

私は横にばつの悪い顔をしている彼を見て言ってやった。

今日学校休んだのは、それを集める為だったのだろうか。

学校で「かつこいい。」と女子からキヤーキヤー言われている彼が、女の子に振られたからといってその子の弟に探りをいれてみたり、その為に賄賂を贈ったりと「かつこ悪い。」事をしているのが少し気の毒に思えた。

きっと本人も自覚しているのだろうか。

「女々しいって思ってたんだろ？」

ポツリ、と彼が呟く。

「そんな事・・・。」

「でも、どうしようもないんだ、納得いかない。せめて好きな奴が誰なのかはつきりしたら諦めもつくかと思って。」

視線を落として紡ぐ言葉が私の心臓をかすかに刺す。

図書室で彼女が「誰だと思う？」と言った言葉が脳裏に浮かんだ。彼女は真っ直ぐな視線をむけていたのだけど。

私はあの時、自分の気持ちに翻弄されてその意味さえ考える余裕はなかったのだ。

彼に言われて改めて思い返すと、彼女は辛い恋をしているようだった。

そして唐突にあの放課後のキスを思い出す。

私はもしかして、と思う気持ちとまさか、と思う気持ちで混乱した。

呆然と立ち尽くす私に気がついて、「どうしたの？」と少年が心配したように尋ねる。

私ははっ、と我に返り「なんでもないよ。」と無理やり笑顔をつくった。

――そうだ、まさか。そんな事あるわけない。彼女が私に恋心を抱いているなんて・・・だって、私は彼女の親友。彼女は私の大切な同性の友達なんだから・・・

北風

冷たい風が桃子の頬をなでる。

雨の日が続いた後、急に冷え込んできた。

彼女は首をすぼめて足早に歩いていた。

今日も担任の園田先生に、例の「居残り。」を言い渡されたのだ。

「説教が長いんだから。」

桃子は愚痴りながら、薄暗くなつた通りの路地を曲がった。

マンションの2軒隣に建っている喫茶店の前を通り過ぎようとしたが――――。

見知った顔が目端をかすめ足を止める。

その二人を確認し、思わず看板の陰に隠れる。

桃子は驚いてその二人を盗み見た。

およそツーショット等思いつかない二人だったのである。

「お父さん……と、なんで武田せんせい？」

一瞬、自分の学校態度について先生が訪問しに来てるのかと思ったのだが。

それならば担任の園田が来るはずだろう、それに……。

武田先生と父はなにやら親密に話をしている。

そうだ……。昔からの知り合いのような。

桃子は寒いのも忘れて二人の様子を窺っていた。

（声が聞ければいいのに。）

中に入ったら気づかれてしまうだろう。

どうしようか、と迷っていると父が何か怒ったように叫びながら席

を立ち上がった。

先生は悲しそうな、けれど真摯な目で父を見ていた。

父は興奮をおさめる為に一呼吸おくと、あの何も見ていないような目になり先生に何か呟いた。

先生は何か言いたそうにしたがそのまま口を紡ぐ。

父がこちらに顔を向けたので、慌てて顔を引っ込める。

急いで隣のビルとの隙間に身を潜める。

（隠れることはないんだった。）

見てはいけないものを見たような気がして、思わず隠れてしまった。

カラン とドアが開く音がした。

そのまま父は反対の方に歩いて行ったようだった。

ホッ。

桃子が胸を撫で下ろしていると、「相川さん。」

突然背後から声を掛けられ、心臓が跳ね上がった。

じつと身を潜めてる桃子を見て、彼は目を丸くしている。

「奇遇ですね、先生。」

桃子はなるべく自然な様子で（行動がすでに不自然なのが。）武田先生に声をかけた。

「どうしたんですか？こんな所で。」

そんな飄々とした態度の桃子を見て先生は困ったような笑顔を見せた。

「相川さんこそそんな所で何してるんですか？」

「家に帰る途中です。」

「もう暗くなってきたのに、女の子がこんな所にいたら危ないですよ。」

先生は本当に心配そうな顔をしたので、ちょっと胃が締め付けられたようだった。

（どうせ、のぞき見してたのばれてるんだろうな。）

桃子はひとつ息を吐いた。

「先生と父が話しているの見かけて気になったので見てたんです。」

「そうですか。」

先生は少し目を伏せて、どう話そうかと迷っているようだった。

ビルの隙間から寒い風が通り過ぎる。

先生の少し癖のついた髪がフワリと踊る。

「ちよつと入りましょうか。」

「はい。」

彼は先程出たばかりのドアのノブをゆっくりと回したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9033c/>

放課後

2011年3月30日06時54分発行